国民国家論と日本近代史研究

桂島宣弘（立命館大学教員、在北京）

1．

最近の日本近代史研究で、方法的視点としてクローズアップされているものとして、国民国家論がある。これは、アンダーソン『想像の共同体』、ホヴズボウム『創られた伝統』、サイード『オリエンタリズム』などに触発された視点で、近代的学問＝学術の総体を国民化のイデオロギー装置として捉え、中でも国民の始源と系譜を一貫して語ってきた文化装置たる一国歴史学に対して鋭い批判を行っている点に特質がある。すなわち、一国的境界に仕切られた、それ自身近代の産物に他ならない領域の内部の歴史を過去に遡って自明視しつつ記述する一国歴史学こそが、実はナショナリズムを言説・学問上に構成する最も強力なイデオロギー装置の一つであったことが俎上に載せられ、告発されているのである。この視点に立てば、マルクス主義歴史学などのいわゆる進歩的歴史学も例外ではなく、階級闘争史観で描かれたものにせよ、被支配階級に視点を据えたものであれ、それらが国民・民族の実体化に果たした役割は、右翼的民族派のそれと大差ないものであったと捉えられている。分かりやすくするために、この点を天皇制を例として論じている酒井直樹の議論に見てみよう。酒井は、天皇制が実体化されていくのは、むしろ近代の言説上でそれが現在に至るまで繰り返し過去に遡って記述されることによってであり、そのことによって「国民としての日本人」「国民文化としての日本文化」「国民言語としての日本語」、そして天皇制が、「いわば『常識』として共有され、あまりにも当然視され」、「それなしにはたんに合意だけでなく論争や対立さえ不可能になってしまうような」実体性を帯びてくるのだという。そして、たとえ天皇制に批判的な記述であったとしても、歴史家が近代に前後して産出された「日本人」「日本文化」を無自覚的な「支点」として、過去に遡っての天皇制の系譜の記述を行うこと自体が、解釈の是非をまたずに実は天皇制を「歴史学という言説のなかに」「制作＝産出」していくことになることが告発されているのである（『死産される日本語・日本人』）。

誤解のないためにいっておけば、昨今の国民国家論は、例えば一九世紀以降の世界史全体を均質な国民国家の生成過程として実態的に描きだすことに主眼を置いている主張ではない。あるいは、近代日本がどこまで国民国家であったのか、なかったのかというかつての日本資本主義論争が提示した問題と関わって、労農派の主張に与して近代日本が実は国民国家（市民社会）であったことを強調することに力点が置かれているものではない。そうではなく、例えば「世界史の基本法則」論であれ、不均等発展論であれ、世界史をそれ

ぞれの一国史の統合体として捉え、その上で発展の特質なり不均等性なりが論じられること自体に、既に諸国民の実体化が横たわっていることが問題とされているのである。この意味では、国民国家論とは、歴史の記述方法に関わって提示されたメタヒストリーを問題とする方法的視点なのだといえよう。

いうまでもなく、こうした国民国家論が台頭してきた背景には、ソ連・東欧崩壊以降のマルクス主義的歴史観（正確にはスターリン主義的歴史観）の劇的衰退という事実がある（衰退自体は一九七０年代から既に始まっていたと考えられるのだが)。そして、マルクス主義歴史学が決して避けてきたわけではないにせよ、やや副次的に取り扱ってきたナショナリズムの問題とどう向き合うのかということが、今日の世界であらためてクローズアップされてきたことも関係している。だが日本近代史研究の上では、公然と国民史や記憶の書き換えを要求する「自由主義史観」などの歴史修正主義とどのように対決していくかという問題も深く関わっている。周知の「自由主義史観」論者の主張自体は、きわめて稚拙なもので、しかも戦後何度か繰り返し主張されてきたことの焼直しという面もある。だが、それとの対決の上で、初めて歴史学の方法的問題が自覚され始めていることに注意する必要がある。やや単純化していえば、これまでこうした稚拙な議論に対しては、「事実」を突きつけ、かつ国民の「責任」を対置することが反論の最も有効な方法とされてきた。つまり、「偽りの国民史」に対して「正しい国民史」を対置する方法である。だが、ベストセラーとなった西尾幹二『国民の歴史』が（さらには司馬遼太郎の歴史小説が)、いみじくも国民史とは国民の「自覚」や「誇り」を構築するものだと開き直って記述されていることに対しては、求められているのは根本的な国民史の解体のための方法的視点でなければならないだろう。無論、「事実」問題は、きわめて重要な問題で、史料に基づく実証的な検証ということは、とりわけ稚拙な議論に対しては有効性を有していることを否定するものではない。だが、あまりに「事実」問題にのみ拘泥するならば、かえって実証的な「正しい国民史」が強調されることになり、先の酒井の言葉を借りれば、国民史の実体化が実証的に強化されていくことになることも看過してはならないだろう。昨今の国民国家論が突きつけている問題は、そうした類の問題なのである。

２．

国民国家論の提示している問題は、戦後歴史学が各グランド・セオリーの土台に暗黙理に埋め込んできた枠組み、例えば「日本固有の歴史」の実在、あるいは（史料批判を経た）文献史料に論理的に妥当な解釈を施すことで客観的な国民史の記述が可能となる

という方法を、根底から揺さぶっている。したがって、正直にいえば、これらの問いかけに応えることは容易なことではない。さらにいえば、近代天皇制国家の凶暴な侵略や帝国日本の植民地支配の思想史的解明を課題としている筆者としては、それらを国民国家一般の問題に解消するかに見える議論に対して抵抗を覚えるのも事実である。

だが、確かに徳川時代までの日本列島上では、日本国家を自明なものとして、その固有の歴史を記述するということは基本的にはなかったは強調されてよいことである。筆者の狭義の意味で専門としている徳川思想史というジャンルから紹介するならば、徳川日本の儒者などの知識人に欠けている認識は、日本の固有性・特殊性という認識である。無論、一七世紀の明清王朝交代という大事件によって、中華と夷狄をめぐる構造的変動に関わっての「自己」認識が、例えば山崎闇斎学派などでは開始されている。だが、それも中華文明圏内での普遍的文明を前提とした優劣の議論であって、固有性やましてや排他的特殊性が問題とされているわけではなかった。私見によれば、固有性や特殊性についての認識は、中華文明圏の最終的解体を促した西洋帝国主義との遭遇によって開始されたのであり、具体的には後期国学・水戸学などの対外認識に胚胎するのである。そして、これらの思想とは一見対立するかにみえる明治の啓蒙思想家にしても、実は自他認識の構造においては、同一の構造を有していたといわなければならない。というよりも、われわれも含めて内にある近代的言説とは、国民化された空間・言語・身体を自明なものとして構築されたものなのであり、一部の「宗教」（キリスト教や仏教など）や明治末年の初期社会主義思想（そして、戦後の一部のマルクス主義）を除けば、この点の例外は存在していないのではなかろうか。

一国歴史学として近代に初めて形成された日本史学は、国民化のための学術の創作という点では、きわめて見やすい特質を露呈している。すなわち、徳川時代までの、中華文明圏内での栄枯盛衰の日本列島上での動向を記述してきたに過ぎない歴史書を、あっさりと国文学の分野に追いやり（あるいは民間史学に追放し）、ドイツから国民史記述のための技法を輸入して構築したものこそが、いわゆる学術的国史学にほかならない。そこでは、まず一国史の扱う地理的領域の自然的特質・特性が記述され、ついでその閉域での国民性の特質、人種・民族の特性が自然的条件と結びつけられながら太古に遡って記述される。それは、当該期に同じく西洋から輸入された考古学・人類学や自然科学などを援用しながら、実証的に記述されるのでなければならない。確かに、戦前の国史学における古代史などは、記紀神話に基づいて天皇系譜の起源を語っていて、それは戦後は非科学的な荒唐無稽なものとして指弾されてきた。だが、それはより実証的に整備されればよいという類のもので

はないだろう。というよりも、戦前の古代史の神話部分のみを荒唐無稽なものと捉えるのは、実は科学的人種論、言語論などが同様に荒唐無稽なものであることを見落としている。骨格や頭蓋骨などを持ち出して人種・民族の特質や優劣を科学的に論じる技法、あるいは古代に純粋な日本語が存在していたことを言語学的に検討する学術知などは、全て天皇神話と同様の民族・人種・言語の固有性という神話に基づいて構成された構築物にほかならない。

ところで、こうした一国歴史学において、歴史や言語・人種の固有性を論じる際に、幕末期から現代までほぼ共通した構造に貫かれているということも見落とされてはならない点である。すなわち、やや単純化していえば、西洋国民国家を基準としながら、中国を差異化しそれとの異質性を強調して日本の固有性を記述するという技法がそれである。紙幅の関係もあるので、ここではこの点を井上哲次郎と丸山真男を例として簡単に紹介しておこう。明治の国粋主義的哲学者として名高い井上は、ドイツ留学を契機として日本における近代的学問の構築に積極的に関わった人物であるが、その過程で近代国史学の形成にも深く関与している。井上の日本史・日本思想史・日本哲学史の記述方法はきわめて明快なものである。日本思想史の記述方法を例に採れば、それは日本思想がいかに中国から自立した展開を遂げて西洋思想と近似したものになっていったのか、という具合に記述が進められていくのである。徳川日本の古学派の展開などは、この視点からは特に重要なもので、中国とは異なった西洋的ルネサンスと近似したものだと井上はいうのである。そして、いうまでもなく、戦後知識人界に大きな影響力を有した丸山真男の基本的視点も、実はこの井上と同様の類であったことはみやすいだろう。丸山は、西洋的近代思想の発展過程を、思惟構造の発展として捉え、この点では井上よりもはるかに精緻な議論を行ってはいるが、その近代的思惟構造の発展を示すものとして位置づけられた思想は井上同様に古学派（殊に荻生徂徠）、そして本居宣長であった。一方、こうした近代的思惟構造とは対極におかれたものこそが、儒学・朱子学に代表される中国の思想的「停滞」であった。のちに丸山は中国についての見方は自己批判しているが、西洋を基準として中国を差異化しつつ日本を語るという視点自体は、終生変わらなかったとみてよいだろう。そして、この両者の間で、日本の固有性を記述するという視点・方法こそが、実は近現代日本の思想・学術の視点と方法を根底的に規定してきたのではなかったか。

3.

既述してきたことは、無論主要には学術的言説をめぐる問題にスポットを当てたもので、

しかも西洋と中国の問題などは、かつて竹内好が提起していた問題の反復に過ぎない側面もある。だが、わたくしには、国民史の解体、あるいは日本のナショナリズムの解体の課題は、単に学術的問題に止まらない課題として眼前に存在している。一言でいえば、それは現在の日本におけるさまざまな実践において、いかに他者認識の新たな立脚点を構築するのかという問題と関わっている。ひと頃の言葉でいえば、国際主義的立場の再構築と置きかえてもよい。

既に述べてきた国民国家論の議論は、こうした実践的課題と関わらせて捉え返す必要がある。この点を強調しておきたいのは、実は近代日本の学術的言説の多くがそうであったように、国民国家論も最近では学術言説化を遂げ、一つの技法になってしまった感もあるからである。あるいは、いたずらに近代日本の国民国家性＝近代性を主張する議論となってしまい、中には国民国家論をそのようなものと誤解して批判する論客（？）まで現れる始末である。それというのも、他者認識の新たな立脚点をどのように構築し、それを資本主義的（国民国家的）世界の先の展望として示しえるのか、という実践的問題が、殊に学問の世界では置きざりにされているからだと、わたくしは考えている。

実はこれを書いている今、わたくしは中国に在住している。国境の外に出ることは、無論それだけで外部性の視点を保証するものにならないことは十分に承知している。それどころか、国境の外にいることは、かえって内部性を喚起し、日本というものの固有性に「目覚めた」実例を、われわれはいやという程目撃している。先に紹介した井上哲次郎も、ドイツで中国人と間違われたことに憤激して、オリエンタリストとして、そしてナショナリストとしての自覚を強めたのであり、あるいは和辻哲郎、平泉澄から戦後の文化論者・政治学者に至るまで、多くは国境の外に出て実は「立派な」ナショナリストとなったのであった。この意味では、わたくしが中国に居住し目撃していることも例外とはいえない。管見の限りでは、居住日本人の多くは（日本人観光客とは違って）、中国の「後進性」や「意外な」他者性に時に満足し、時に憤慨し、固有日本文化を「発見」したりしている。そして、戦争責任の問題についても、それに前向きに対処しようとすればするほど、かえって日本人の責任主体を立ち上がらせ、いつのまにか「立派な」日本人論に帰結してしまっている姿さえ見かける。この意味では、加藤典洋らのネオ・ナショナリストの主張は、「良心的」日本人にささやきかける甘い罠であることは、殊に国境の外にいると見やすいのだ。

国際主義・国際連帯とは、こうしたギリギリの所からいかに他者理解の新しい立脚点を見いだすのかということから始まるのであろう。国民国家論の提起している問題を見つめつつ、未だ抽象的ではあるが、中国でそうしたことを考えている。